

[成果情報名] イチゴ‘きらび香’頂部軟質果の発生要因

[要 約] ‘きらび香’で発生する頂部軟質果は、定植時の多肥による窒素過多や塩基バランスの不均衡などによる、カルシウムの移行抑制の可能性が高い。

[キーワード] イチゴ、着色不良、頂部軟質

[担当] 静岡農林技研・野菜生産技術科、加工技術科

[連絡先] 電話 0538-36-1588、電子メール agriyasai@pref.shizuoka.lg.jp

[区分] 野菜・花き（野菜）

[分類] 技術・普及

[背景・ねらい]

新品種‘きらび香’は優れた特性を有している反面、頂部軟質果や白ろう果など着色不良果の発生が生産現場で問題となっている。そこで、その発生要因について検討するとともに、安定生産のための基礎資料に資する。

[成果の内容・特徴]

- 1 発生果実は、正常果と比べ果実中のカルシウム含量が特に先端部で少ない（図1、2）。
- 2 頂部軟質果の発生割合が高いほ場では、EC や $\text{NH}_4\text{-N}$ 、 $\text{NO}_3\text{-N}$ 、K 等が他ほ場と比べて高く、多肥や塩類集積が発生要因となっている（図3）。
- 3 培地中に N 成分がない場合、標準の基肥（16.8kgN/10 a）での発生は少なく、N 成分1.5 倍量の基肥（25.2kg N/10 a）では発生が多い（図4）。また、前作の肥料成分の残риがある場合は、慣行の施肥量でも頂部軟質果の発生が多い。
- 4 考えられる対策
 - （1）除塩を実施するとともに、土壌診断結果と堆肥の施用量に基づいて基肥量を減らす。
 - （2）土壌消毒剤を使用する場合は、基肥量を減らす。
 - （3）緩効性肥料を積極的に利用し、一時的に肥料が効きすぎないように施肥管理をおこなう。液肥混入機がある場合は、追肥重点でおこなう。
 - （4）原水を考慮した EC 管理をおこなうとともに、「紅ほっぺ」よりやや低めの EC で管理し（最大 原水+0.5 mS/cm まで）、培地内 EC を常に低めに保ち、生育を停滞させない。

[成果の活用面・留意点]

- 1 直接の原因は果実のカルシウム欠乏と考えられるが、カルシウムの葉面散布では回復しない。
- 2 頂部軟質果発生ほ場で白ろう果を併発する場合がみられるが、その発生要因は今のところ不明。
- 3 温度や湿度は頂部軟質果発生を助長することがあるが、主要因ではない。

[具体的データ]

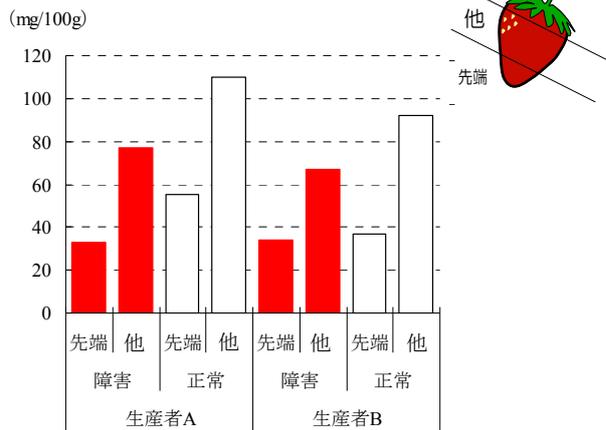


図1 果実中のカルシウム含量



図2 頂部軟質果

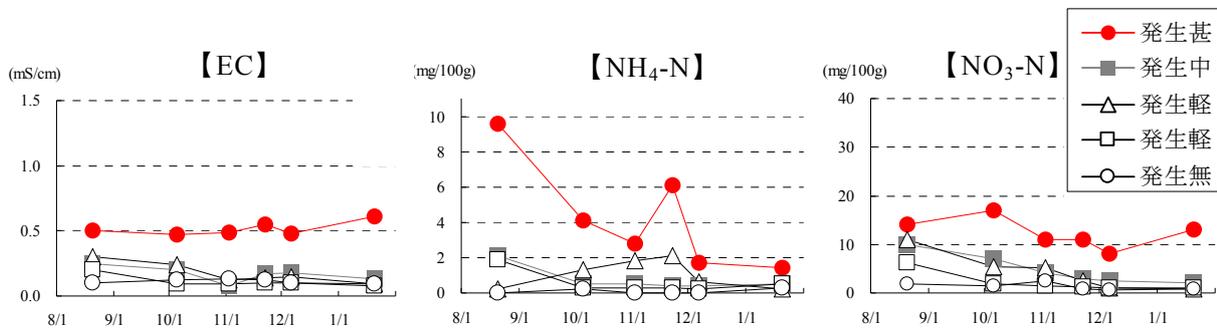


図3 現地生産ほ場栽培中土壌の化学性の推移

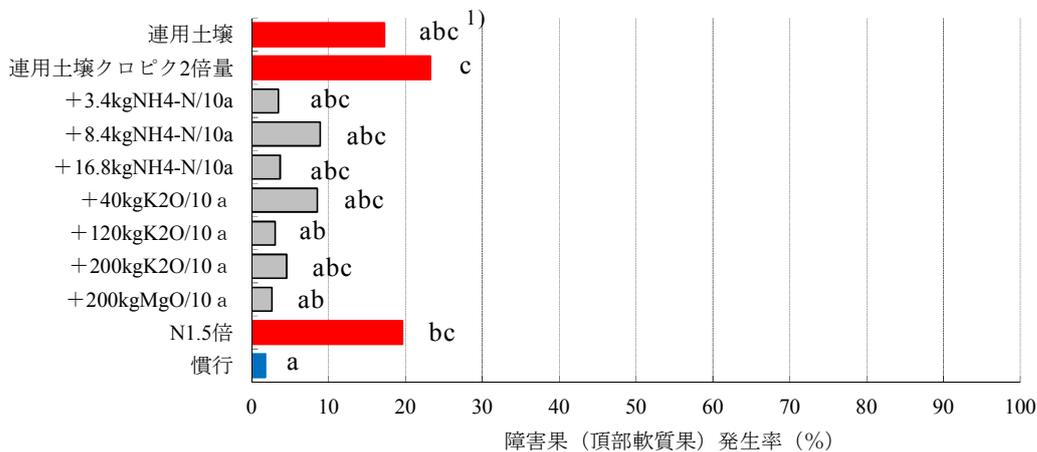


図4 頂果房および一次腋果房の障害果（頂部軟質果）の発生状況

1) アルファベットは同一符号間に tukey の多重比較 (5%水準) で有意差なし。

[その他]

研究課題名：イチゴ‘きらび香’の安定生産技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2015～2017年度

研究担当者：河田智明、池ヶ谷篤、望月麻衣、井狩徹